
元気のない哀へ・・・

平葉陽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元気のない哀へ・・・

【Nコード】

N6791B

【作者名】

平葉陽蘭

【あらすじ】

元気のない哀……。それにはある理由が……。(それは本編を)コナンはそんな哀に声をかけ、哀は理由を話します。探偵団の3人はそんな哀を見て、コナンに協力を求め、哀を元気付けようと思います……。

FILE 1 死への招待状（前書き）

哀ちゃん主役の第1話！

哀ちゃんが危険な目に遭います。

あと1話ではタイトルにも「死」が入っています。

第2話では「死ぬ」「殺す」と言った言葉が出てきますのでそういうのが苦手な方は、第1話・第2話はとばして、第3話からお読みください。

FILE 1 死への招待状

暗い暗い夜空の下

タッタッタッタッタ・・・・という走る靴音

それと同時に聞こえてくる「ハアハアハア」という荒い息・・・・
だいぶ疲れているようだ。
走っているのはまだ幼い少女である。

その後ろからタタンタタンタタン・・・・という2人の靴音
時折、タッタッタッタッタと走っている・・・・
この男たちの手には銃が握られている・・・・

そう、少女は男2人に追われているのだ。
ただ追われているのではない。
命を狙われているのだ。

なぜ命を狙われているのだろうか。
そして男2人はなぜ少女の命を狙っているのだろうか。
その理由は少女の名と男2人の名を聞けばわかるだろう・・・・

少女の名前は灰原哀、男2人はそれぞれジンとウオツカといった。

哀は逃げながらこうなるまでの事を思い出していた。

あれは夕方のことだったわね・・・・

新聞を取りに玄関のポストに行ったら、あんなものが入っていたんだもの・・・

それは哀を暗い暗い世界へと導く招待状であつた。

宛名は灰原哀様だつたわ・・・
中には・・・

灰原哀、いや宮野志保よ。
シエリー

やっと見つけたぞ。

もう絶対に逃がさないからな。

今日の夜11:00、1人でY倉庫に来い。

時間に遅れたり、仲間を連れてきたら、

どうなるかわかっているだろうな！

では、Y倉庫で待っているぞ。

G
i
n

この手紙と倉庫への地図が入っていた・・・
これを見た時は驚いたわ。
いつの間に私の正体を・・・

でも行かないわけにはいかない。

そして1人で行かないといけない。

そうしないと、私を匿^{かくま}ってくれていた博士はもちろん、

工藤君や私と接していた人は全て・・・

まあ、私が1で行ったからってみんなが無事っていう保障はないけれど・・・

でも行かなかったら・・・

ジンたちなら確実に工藤君たちを・・・

私のせいで周りの人を巻き込むようなことはしたくない。

手紙を読んで、気がついたら無我夢中で逃げていた・・・。

記憶がとんでしまっているのかしら・・・。

でも今はあの2人から逃げないといけない。

さつきから、この道を一直線に走っているけれど、この道はどこまで続いているのかしら・・・。

そういえば私、もう随分走っているけれど、

どうして走り続けられるのかしら・・・。

息は「ハアハア」してて決して楽ではないわ・・・。

さつきからこの状態で全然変化がないわね。

それにジンたちはなぜ撃つてこないのかしら。

私としてはその方が絶対いいに決まってるんだけど・・・

曲がろうと思ってもまわりに何も無いから、かえってくねくね曲がる方が危険だし・・・。

私に何か聞きたいことがあるんでしょうね・・・。

そうだとしても、ジンたちならまずは一発、二発撃つて私を止めてから聞くとするんだけど・・・。

哀の進む道はやっぱりいつまでも続くものではなかった・・・
そう道の最期おわりがきたのだ。
それは、壁という名の哀の行く手を阻むものだった。

あっ！壁だわ。どうしよう・・・もう進めない・・・

哀が後ろを振り返ると・・・

そこには、やはりジンとウオッカの2人の姿があった。

FILE 1 死への招待状（後書き）

私、平葉陽蘭の2作目。

哀ちゃん主役のこの話、どうですか？

一応、哀ちゃんが主役ですが、コナンや探偵団の3人もからんできますので・・・。

哀ちゃんが主役なので、哀ちゃんのセリフがあまりに少なくならないように気をつけたいと思います。

感想や評価待ってます。

FILE 2 最期の時！？（前書き）

行く手を”壁”というものに阻まれた哀ちゃん。
ジンとウオツカと対面して・・・

FILE 2 最期の時！？

ジンとウオツカは哀から5〜6mほどのところまで近づくとそこで止まった。

「宮野志保よ。おまえももう最期だ。まあ、ここまで無事でいられた事を感謝するんだな……。」
と銃を手にしているジンが言った。

「そうね……。ここまで生かしてくれたんだもの……。このことについては……。お礼を言わないとね……。私をすぐに……。殺らないってことは……。何か聞きたいことが……。あるみたいね……。。」

と言う、哀の声は震えていた……

「よくわかってるじゃねーか……。では、希望どおりに聞いてやる。あんなところから、どうやって逃げたんだ？」

ジンは哀に聞いた。

「それは教えられないわ……。 (私の正体を突き止めているんだから、身体が縮んで脱走したってことはわかってるんでしょ。うね……。私がAPT-X4869を飲んで、縮んだってことには気づいているのかしら……。) 」

「そんなことを言っただけで済むのも今のうち……。ですよ？ジンの兄貴。」

「そうだ、ウオツカ。宮野志保、おまえに一度だけチャンスをやろう……。組織に戻って来い。戻って来るなら、おまえの周りの奴は生かしておいてやる。……。」

ジンは哀にチャンスを与えたのだ。

「生きていたいなら組織に戻って来い。」

これがジンが哀に与えた“生きるための条件”であった。

それに対して、哀の出した答えとは・・・

「それは出来ないわ・・・。（これで私が組織に戻ったとしても・・・、工藤君たちの命の保障はないわ。それは私にだって言えること・・・。）」

哀の出した答えは「NO」ー組織には戻らない。
これが哀の答え。

「宮野志保よ、これが最後のチャンスだ。もう一度聞こう。組織に戻ってこないか？」

「・・・じゃあ、私からも1つだけ質問してもいいかしら？」
「なんだ？宮野志保、言ってみろ。」

哀がジンに聞いたことは・・・

「お姉ちゃんをどうして殺したの？その理由を教えてください限り、私は組織には戻らないわ。（たぶん、言っても教えてくれないだろうけど・・・）」

「それは答えられないな・・・。どうやらオマエには死んでもらうしかないみたいだな・・・。」

そう言ったジンは哀に銃口を向けた。

ジンの瞳は真っ直ぐ哀の方を向いている。

その瞳はしっかりと標的である哀を映し出していた。

ジンは哀を殺すことに未練はないようだ。

「私ももう最期ね・・・。お姉ちゃん、もうすぐ“そっち”へ行くからね・・・。」

哀は“死ぬ覚悟”を決めた。

そんな時、哀はジンとウオツカの2人以外の人の気配を感じた。それは組織の人間ではないようだ。

哀の第六感がそう言っている。

でも哀はさほど気には留めなかった。

だって“もうすぐ死んでしまうのだから”

「そろそろお別れの時間だ。恨むんならあの親の下に生まれた事を恨むんだな……。」

ジンがそう言って銃の引き金に指をかけた時……

「灰原、逃げろ!!」

という声が哀の耳に届いた瞬間、哀はその声の主に突き飛ばされた。それと同時に銃声がして、その声の主はジンの銃によって撃たれた。

まだかろうじて息はあるようだ。

哀は銃声のした方へ振り向いた。

そこには哀を突き飛ばした少年が倒れていた。

ジンとウオツカの姿はもう消え果ていた。

その少年は哀もよく知っている人であった。

そして……

「工藤君!？」
と哀が叫んだ瞬間・・・

「ハッ！」

哀はいつものベッドの上にいた。

時間は午前4：44

「あれは・・・夢だったのね・・・。私、ちゃんと生きている
のね・・・。もちろん工藤君だって・・・。4：44なんて何かの
偶然かしら・・・。」

自分が“生きている”ことを確認すると、台所へ行きコップに1杯
の水を飲み、ベッドへ戻った。

FILE 2 最期の時！？（後書き）

どうでしたか？哀ちゃんの夢の中のお話・・・

自分ではかなり頑張って書きました。

この夢の中の話はFILE 2 2分ですが最初は1つの予定でした。

最初は夢の話長くかけないと思っていて・・・でも書いていると長くなって・・・。

まあこの2話がプロローグだと思ってください。

最後の4：44ですが別に意味はありません。

私が小5の時の林間の帰りのバスの中で見た怪談の映画に4：44に何かが起こるというものでした。

それでなんとなく入れてみました。

その話の内容は全然覚えていませんが。

それでは次話でお会いしましょう。

FILE 3 沈黙空間から・・・（前書き）

この話でも「殺す」という言葉が出てきてしまいました。
もう出ない・・・とか言っていたのに・・・
出てくるのは1ヶ所だけです・・・

FILE 3 沈黙空間から・・・

朝7時過ぎ・・・

哀は博士といつものように朝ごはんを食べていた。

いつものようにと言ったが、全てが“いつものように”ではなかった。

TVの中からの声と食べている音しかない・・・

そう、今阿笠邸では会話がないのだ・・・

2人が言ったのは「おはよう」と「いただきます」だけ・・・

でもこれはいつもというか習慣的なものだから、

実際の所2人は起きてから“会話”をしていないのだ。

もつとも博士は話そうとしたが、哀のあまりにも元氣のない「おはよう」という声を聞いて、

次に発する声を失ってしまったのだ・・・

「・・・・・・・・・・」

相変わらず阿笠邸では沈黙が続いている。

しばらくして・・・

博士はこの“沈黙の空間”に耐えられなくなったのか、とうとう口を開いた。

「哀君……。」

と博士は哀に話しかけたが……

「……。」

哀からの返答はない。

もう1度博士は哀に話しかけた。

「哀君……。どうしたんじゃ？朝から元気がないみたいじゃのぉ……。」

「……。」

やはり哀からの返答はなかった……

（今は話したくないんじやろう……。これ以上哀君を刺激するのはやめよう……。しかしワシに話せない事っていったい……。）
と博士は思い、哀に話しかけるのを諦めた。
博士だつてこれくらいの空気は読める。

そんな博士の顔をみて哀は……

（博士……。私の事心配してくれてるのね……。博士には悪いけど今は言えない……。もう少し心が落ち着いたら話せるかもしれない……。それにこの怖さを本当にわかつてはもらえない……。本当にわかつてもらえるのは工藤君だけ……。だからっていつまでも黙ってるのは博士に悪いわよね……。）
そう思った哀は自分から博士に話しかけた。

「博士……。」

「どうしたんじゃ……。哀君。」

博士は“普通”に答えた。

「心配かけてごめんなさい……。理由はまだ離せないけど……。私なら大丈夫だから。」

と言った哀は博士の前で“につこり”と微笑んでみせた。

もちろん、この微笑みはつくられたものだだったが・・・
このつくられた微笑みは哀の“博士を少しでも安心させたい”とい
う博士への思いやりなのだ。

「ごちそうさま。」

お決まりの言葉^{フレーズ}を口にした2人・・・

哀は2人分の食器を運ぶと博士に言った。

「じゃあ、後は頼んだわよ。」

そう、朝の食器洗いは博士の仕事なのである。

そう言うとき哀は、身支度を整え学校へ行く用意をした。

8：00

ランドセルを背負った哀は、これまたお決まりの言葉^{フレーズ}を口にした。

「じゃあ行ってくるわね、博士。」

「ああ。気を付けて行ってくるんじゃないぞ。（哀君は「大丈夫。」つ
て言っておったが本当に大丈夫なのかのお。朝のあの元気のなさは
絶対何かあると思うんじゃないが・・・。新一にでもまた相談してみ
るか・・・。）」

哀は博士の前で元気な振りをしていたが、博士にはやっぱり見抜か
れていたのである。

哀は1人になると、昨日の夢のことを考えていた・・・。

あんな夢を見たのは初めてだわ・・・。
ジンたちに追いかけられたり、殺されかけたりした夢は何度もある・
・・・。

でもあれは全て私だけだったわ……。他の人が巻き込まれたんだもの……

しかも工藤君が……………。

それにあんなに追い詰められたのも初めて……………。

哀はあんなに追い詰められたせいで元気がなかったのだが、それ以上にコナンが撃たれたのがショックだったのだ……。

そんな哀に声をかけようとしている人物がいた。

その人物とは哀のショックの“種”にもなっている人物だ。

その人物は哀が元気がないとも知らずに、いつものように声をかけた。

「灰原。」

FILE 3 沈黙空間から・・・（後書き）

半月以上更新しないですみませんでした・・・

高校の宿題を必死にやっていたときがありました・・・

春休みのくせして宿題だすんですよ・・・

もらってすぐ少しやっただんですが、ちよつとやらない期間があつて、ちよつとあせりだしてがんばって・・・

4月3日に終わって・・・

その間、ノートに小説とかほとんど書かなくて、やっとなです・・・

次の話もできているので、次話の更新は早いと思います。

FILE 4 工藤君だけ・・・

昨日の夢のことを考えていた哀は、周りのことが見えていなかった。だから・・・

「えっ!？」

哀はとても驚いていた。

「なんだよ、灰原。そんなに驚くことないだろ？」

「あつ、工藤君・・・おはよう・・・。」

コナンは哀の異変に気がついた。

「は・・・灰原・・・。」

「・・・。。。。。。。」

哀からの返事はない。

無視しているのではない。

“心ここにあらず”といった感じである。

飛んでしまっているのは心だけ。

足はちゃんと学校への道を刻んでいる。

コナンはもう一度、今度はさっきよりも大きな声で哀を呼んだ。

「灰原!」

「工藤君、何？」

哀は気づいたようだ。

「あつ、ひょっとして何回か呼んだ？そうならごめんなさい・・・。」

「まあな・・・。それに謝まなくなっただっていいさ。それより、何

かあったのか？オレでよかつたら相談に乗るぜ。」

オレにまかせろといったような感じで自分を指差す。

「ええ、そうさせてもらうわ……。今、相談できるのは工藤君だけだしね……。」

とつい本音を漏らした哀……

コナンは後ろを見るとこう言った。

「今聞こうと思ったんだけどな……。後で聞く……。そうだな休み時間にでも……。」

コナンは相談に乗ると言いながら、「後で……。」と言ってきた。たぶんちゃんと理由があるのだろう……

「えっ、今聞いてくれないわけ？」

とほんの少し怒り^{おこ}気味に言った。

「後ろを見てみる。」

そう言われた哀は後ろを見る。

いつもの3人、光彦・元太・歩美がこっちに向かって走ってきていた。

「そういうことね……。じゃあ休み時間にも……。聞いてもらおうかしら。聞いてもらえるってわかっただけでもちょっと安心したわ……。」

「おはようございます、灰原さんにコナン君。」

「おはよう、コナン君に哀ちゃん。」

「ちよつとまってくれよ、光彦に歩美。」

ちよつと遅れて元太がやってきた。

「灰原にコナン、何の話してたんだ？」

哀とコナンの話していた内容を知りたがる元太。

「別に大したことじゃないから。」

もちろんのこと哀は内容を口にしない。

「また抜け駆けですか？コナン君。抜け駆けはコナン君の得意技ですからねえ。灰原さんですか？」

「なんじゃねえよ。」

「だから大した話じゃないって・・・。」

2人とも“例の話”は口にしない。

「もう行きましょう。あんまりゆっくりしていると遅刻してしまいますよ。」

歩いていると自然に3列になった。

1列目・・・哀1人

2列目・・・コナン・歩美

3列目・・・光彦・元太

哀をのぞいた4人は何やら楽しそうに話しながら歩いていた。

ただ、コナンは“楽しそうに話している振り”なのだが・・・やっぱり哀のことが気にかかるのである。

それを3人にわかられないように”そう”しているのである。

そんなとき、歩美が小声で言った。

「ねえみんな、今日の哀ちゃんって元気ないと思わない？」

光彦と元太もうなずいた。

「コナン君、何か知りませんか？」

「ああ、オレも朝会った時から元気ないなあって思ってたんだけど

な。

なんかあの状態だからそつとしておいた方がいいと思ったんだ。」

もちろん、「哀の相談に乗る」なんてことは一切口にしない。

探偵の守秘義務とでもいったものだろうか・・・

哀はちゃんと学校へ足をすすめていたが、頭の中から昨日の夢のことが抜けることはなかった。

哀たち5人は学校へ着いて、入っていった・・・

FILE 4 工藤君だけ・・・（後書き）

なんかためててもなあゝって思ったので、投稿しました。
なかなか話が進みませんね・・・（笑）
まあその方が話が長くなるからいつか・・・
次話では哀がコナンに相談します・・・

FILE5 Not negative but positive (前書き)

Not negative but positive

「ネガティブではなくポジティブです。」

「探偵をなめんなよ」というサブタイトルとで迷ったんですが・・・
なんか英語にしたいくなって・・・

FILE 5 Not negative but positive

昼休み、教室の隅で哀とコナンは朝の話を続きをしていた。
他の人には聞こえぬよう、小声で・・・

「なあ灰原、例の話だけだよ、ひよつとして黒の組織関係じゃねー
のか？そつなら遠慮しないで言えよ。」

「えっ、どうしてわかったの？」

ズバリと言い当てられ、驚く哀。その理由を尋ねる。

コナンの回答は・・・
こたえ

「おめえーが朝、言っただろ？このことを相談できるのはオレだ
けだって・・・。オレにしか言えないことって言ったらそれぐらい
しかねーだろう？」

「えっ、たったそれだけのことで？他の事かもしれないじゃない。」
哀はほんのちよつとしたことで悩みの種を宛当てられ、まだ驚いて
しまった。

それは“普段”いつもの哀ではなく、“今”の哀だからだろう。

「オレを誰だと思ってるんだ？それぐらいおまえの顔見りやわかる

さ。探偵の勘つてヤツでな。」

そう、“今”の哀の頭からはコナンの探偵能力ちからのことが抜けていた。

「そろそろ本題に入ろうか。」

「ええ……。」

哀は内容をなかなか話しださない。

それは、やっぱり“あの事”が関係しているのかもしれない。

言いくいのはわかるけどよ、言わないと解決しないぜ。」

「わかったわ……言っわ。けど、絶対に『嘘うそだろ?』とかって言わないでね。実はね……。」

と哀は昨日の夢のことを話し出した。

もちろん、“あの事”も隠さず全部すべてを……

その話を聞いたコナンの第一声は哀の思っていたものと全く違っていた。

「よかったじゃねーか……。」

その言葉を聞いた途端、哀は……

「何が『よかったじゃねーか……』よ。工藤君ならわかってくれ

と思ったから話したのよ。」

そりゃそうだ、わかってもらえと思ったから話したのにあんな言い方をされたんだから。

だが、本当はそうではないのだ・・・

「話を最後まで聞けよ。オレはこう言いたかったんだ。『よかったじゃねーか、夢の中のことで。』ってな。」

「夢のことだよかった。って確かに現実ほんとうに起きたんじゃないけど・・・。」

「なあ灰原、もっと“ポジティブ”に考えようぜ。」

「ポジティブに？」

ポジティブの意味はわかっているが、思わず聞き返していた。

「ポジティブ・・・つまり、前向きに考えろってことさ。どれだけ怖かったかは話を聞いてよくわかった。アイツらのことはお前の次によくわかってるつもりだ。でもな、いつまでもネガティブ・・・後ろ向きな考えのままじゃダメだ。」

「・・・ええそうね。確かにいつまでも“ネガティブ”じゃダメよね・・・。現実ほんとうに起こったんじゃないんだから・・・って思わないといけないわよね・・・。」

ありがとう工藤君、話を聞いてくれて。」

哀の心はこれでほとんど“いつも通り”になっただろう。

「わかってくれたんならいいさ。まあ探偵は“ネガティブ”な考え方してちゃやってらんねーからな。」

確かにそんな考えでは探偵はできない。

“ポジティブ”な考えが探偵には必要なのである。

「なんかスッキリしたわ。こんな事相談できるのは工藤君しかないなもの……。」

「もし、組織関係のことで何かあったらオレに言えよ。オマエのこととはオレが守ってやるからよ。“オメーが夢で見たオレ”のようにはならねーから安心しとけ。」

「えっ……。」

哀はびつくりした。だって一言も「工藤君が撃たれたかのが一番シヨックだった」

なんて言っていないのに、“それ”を知っていたかのようにさらっとあんなことを言うんだから。

「探偵^{オレ}をなめんなよ。それぐらいオメーの話聞いてたらわかるさ。」
「やっぱり気づいてたのね。でもほんとうにありがとう。」

そう言った哀は教室を出て行った。

落ち着く所に一人でいたいのだろう……。

FILE 5 Not negative but positive (後書き)

4月8日以来、約2週間ぶりの投稿・・・

高校の宿題とかやってたり、他の事とかで忙しくて、なかなかノートに書きためられず・・・。

次話は、ちょっと哀ちゃんがお休みでコナンと探偵団の3人のシーンです。

哀ちゃんは次話の最後の方にはでてくると思います。

FILE 6 コナンへの依頼（前書き）

哀ちゃんがでてくると思います・・・と言ってましたが、次回に持ち越しとなりました・・・。
すみません。

FILE 6 コナンへの依頼

哀が教室から出て行つたあと、光彦・元太・歩美の3人がコナンのもとへ駆け寄ってきた。

「やっと終わりましたか。」

こういう言い方をするとすることは、3人はコナンに何か言いたいことがあつたのだが、

コナンは哀と話していたため話が終わるのを待っていたということだろう。

「何か用か？」

「うん、あのね……」

と言いかけた歩美の声をさえぎって元太が言った。

「灰原と何話してたんだ？コナン」

「それは言えねーな。」

コナンは即座にすくそう答えた。

すると光彦が元太にあることを耳打ちした。

それを聞いた元太は納得したようだ。

そして光彦がコナンに……

「コナン君、“今回”は話さなくていいですから、そのかわりちょっと頼みたいことがあるんですけどいいですか？」

“今回は”と言ったところを見ると、光彦も哀とコナンの話の中身が気になっていたようだ。

「ああ、いいけど。」

コナンはすんなりとOKした。

「それでなんなんだ？オレに頼みたい事って。」

すると「歩美ちゃんから話してください。この事を提案したのは歩美ちゃんなんですから。」

と光彦が言った。

この事を提案したのは歩美で、その計画をコナンに手伝ってほしいらしい……。

「あのね……コナン君ならもう気づいてると思うんだけど……今日の哀ちゃんって何か元気ないでしょ？だから私たちで哀ちゃんを元気付けてあげようと思うの。それにコナン君に協力してほしいんだけど……。」

コナンは3人に何を頼まれるのだろうか……

歩美に代わり、光彦が話し始めた。

「コナン君に頼みたいことは2つあるんですよ。1つは暗号を作ってほしいんです。」

「暗号！？別にいいけどよ。何のために？」

「3人で相談したんですが、“それ”をやる場所が博士の家になったんです。でも灰原さんには始めるまで内緒にしておきたいんです。なので灰原さんに一度家を出てもらわないといけないんです……。」

元太が「俺にもしやべらせろ。」と言って話の続きを言い始めた。

「それで、どこかで遊ぶってことにして、どこかに集合するんだ。でもそこに俺たちは行かない。コナンが灰原に暗号の紙を渡すんだ。灰原が暗号を解いてる間に俺たちは博士の家で準備する。つまり暗

号は時間を稼ぐためのものだ。」

もう満足したのか、続きを言ってもいいぞと言っているような目で歩美を見た。

歩美にはちゃんと伝わったらしい。

「だから簡単な暗号じゃダメなの。歩美たちじゃそんなの作れないから……。」

「わかった。簡単な暗号^{ヤッ}じゃだめなんだな……。それはいいとして、オレが灰原に渡すってことでいいのか？絶対『どういうこと？』とかって聞いてくるぞ。」

そう、哀に暗号の紙を渡す方法はこの作戦が成功するか“鍵”を握っているのだ。

「そうなんですよ……。それはわかってるんですけど、それくらいしか思いつかなくて……。博士に頼んでもコナン君と同じ事ですし……。」

このときコナンは昨日蘭が

「あさつての土曜日、部活は9：00～11：00だから……。」
と言っていたのを思い出した。

「なあ、オレたちは集まらねえけど“集合場所”オレん家^ちにしねえか？明日さあ、蘭姉ちゃん朝は部活でいないけど、昼からは家にいてるんだ。だからあの役は蘭姉ちゃんでもいいよな？ってか明日の昼から実行ってことでいいのか？」

「日時のことを忘れてました。それでいいんじゃないですか？2人ともいいですね、これで。」

2人は「OK」という風にうなずいた。

「早くやりたいですけど、今日はいくらなんでも無理ですから・・・でもコナン君の家に集合ってだけじゃなんか不自然ですよね・・・」

確かにそれじゃあ目的が見えにくく不自然だ。

「じゃあよく行く公園で遊ぶってことにしてコナン君の家に集合して行くってことでいいんじゃない？」

「それでいきましょう。あとコナン君に頼みたい事は、博士への連絡です。灰原さんに気づかれないうちに博士へこの事を伝えてください。」

哀に気づかれてしまつては、効果が薄れてしまう。
だから絶対に実行するまでは哀に気づかれないうちにしないではない。

「よし、わかった。で、具体的に何をするんだ？」

「何をどうするかは、今日学校が終わったら光彦の家で3人集まつて決めるんだ。」

3人？この元太のセリフから考えるとコナンは3人の中には入っていないようだ。

コナンも「オレは？」といったような顔をした。
それを見た光彦は・・・

「今回は僕たちで考えた事なんで僕たちで計画したいんです。」

「それならいいさ。じゃあ明日の朝・・・そうだな10時くらいにオレン家^ちに来いよ。」

実行前にどういう計画か知っておきたいしな。それにその方が行ったらすぐ手伝えるだろ？」

自分が3人の中に入っていないと不満だったが、今のを聞いて納得したようだ。

「わかりました。明日の朝10時にコナン君の家ですね。そこで最終の打ち合わせということにしましょう。」

「じゃあ、今日の帰りに哀ちゃんに言っておかないとね。明日、いつもの公園で遊ぶからコナン君の家に2時に集合って。2時でよかったよね。」

みんな賛成し、“集合時間”は午後2時になった。

「じゃあ、コナン君頼みましたよ。」

「頼んだぞ、コナン。」

「お願いね、コナン君。」

そう言うつと3人は教室を出て行った。

「暗号か・・・どんなのにしようか・・・。」

FILE 6 コナンへの依頼（後書き）

約半月ぶりの投稿・・・

自分では頑張って書いているのですが、宿題などがあつてノートに書き溜める時間がなかなかとれないんです。

最近は休み時間に書いてたりしてます。

それでは次話でお会いしましょう。

次話では絶対に哀ちゃんてきますので

FILE 7 作戦の第一歩（前書き）

作戦を実行するにあたって歩美たちは哀に
明日“遊ぼう”と誘います。

さてその真の意味とは？（笑）

FILE 7 作戦の第一歩

「じゃあ、打ち合わせ通りにいきますよ。」

その後、3人は哀を誘うにあたっての役割を決めていた。どのように言うかまでは決めていない。

それまで決めてしまうつまったりして不自然に見えてしまうからだ。

それをコナンにも伝えた。

まずコナンが哀に明日あいてるかどうかが聞き、あいているなら“遊ぶこと”を伝える。

歩美たちは哀がOKしてくれるように押す。

コナンたちが教室を出る時、哀はすでに校門を出ようとしていた。4人は哀に追いつくため急いでロッカーに行き、靴を履き替え、校門を出て行った。

そのころ、哀はというと・・・

“2人”で歩いていた。

だが、本当に2人で歩いているのではない。ではいったいどういうことなのか・・・

「一緒に帰ろうと思っていたけど・・・一人で帰ってるわ・・・。」

そう、実際の2人ではなく“精神的な2人”なのである。

心の中では「一緒に帰ろう」と思っている。

でも足は進んでしまう・・・

ひょっとしたら哀が気づいていないだけで、心のどこかがそれを拒んでいるのかもしれない。

そんな哀の後ろから複数の走る靴音がした。

哀はそれをコナンたちだと思ったが、振り返ることはしなかった。

「じゃあ、始めるよ。」

という歩美のささやき声でこの作戦は始まった。

「灰原、明日あいてるか？」

コナンはいきなり聞いた。

「ええ、あいてるけど・・・。」

哀はコナンたちの方に振り向くと同時にそう言った。

コナンはこの言葉になんとなく哀を包み込んだベールのようなものを感じた。

なんとなくということはそれが不完全な証拠である。

「あいてるんなら・・・明日の昼からみんなで米花公園に遊びに行かねーか？」

それでも一応コナンは、少し遠慮気味に聞いた。

「えっ、明日？」

哀はちよつと驚いたようだ。歩美たちが誘ってきたのならまだしも、コナンから誘ってきたからだ。

ここからは歩美たちが頑張らないといけない。哀がOKしてくれないとこの作戦は実行できない。

歩美たちが必死に哀を誘っているのを見てコナンは思った。

“灰原が誘われても「行かない。」って言ったらどうするんだ？”と。

コナンとしては哀の話を聞いているから、無理強いはしたくない。コナンが歩美たちの提案に賛成したのは、もちろん「哀に元気になつてほしいから」という理由だ。

あと、哀の心がそういう状態にあると思ったからだ。

でも、今気づいた。元氣に見えるのは“表面^{みため}上”でほんとうは“そう”ではないかもしれない。

こんなことをコナンが思っていると・・・

「じゃあ行こうかしら。何時に行けばいいの？」

哀は行くことに決めたようだ。

それを聞いた光彦は・・・

「2時にコナン君の家に集合です。米花公園^{あやこ}に行くにはコナン君の家の近くを通るので、そうすることに決めたんです。」

「ええ、わかったわ。明日の2時に江戸川君の家ね。」

今この作戦はスタートラインから一歩踏み出し、ゴールへと進みだ

した。

そのあと5人は“明日何をして遊ぶか”話していた。
少し行った四つ角のところで「じゃあ明日」などと言って、
哀とコナン、歩美・光彦・元太の2つに別れた。

歩美たちとの距離がある程度あくと、哀はコナンにあえてこんなことを聞いてみた。

「工藤君、どうして私を誘ったの？まああの雰囲気からして工藤君が言い出したんじゃないのはわかったけど・・・。」

哀は怒り気味に言った。

「ああ、そのことが。いくらあんなことがあつたからって閉じこめるのはよくねーからな。確かに言い出したのはアイツら3人だ。オレが誘ったのは成り行きだったんだけどな。それに灰原^{オマエ}が“本当に”聞きたかったのはこの事だろ？それならそうと素直に言えよな。」

そう、哀は怒っていたのではなく、本当は誘った理由が知りたかったのだ。

しばらく沈黙が続いた。コナンはその沈黙をすぐに破ることはしなかった。

そしてこの沈黙を破る場所へたどり着いた。

それは哀（博士）の家だった。コナンは待っていたかのように言った。

「じゃあ、明日な。」

「ええ。あと家まで送ってくれてありがとう。」

「いや、送るつもりはなかったさ。あの雰囲気じゃあ言い出しにく

かったしな。ここだったらほぼ自然にこつなるだろ？」

そしてコナンは哀と別れた。

このとき哀はもちろん知らなかった。
歩美たちの秘密の計画を。

FILE 7 作戦の第一歩（後書き）

FILE 6の投稿から約1ヶ月がたってしまい、申し訳ありませんでした。

学校の宿題などで、家でノートに書く時間がなく・・・学校の休み時間に書いていたり・・・頑張っではいたんですが・・・じゃあ、次は早いのか？実はあまり早くないと思います。というのも高校の定期テストが来週の14日～21日まであるんです。

（もちろん土日は休みですよ）
なので余計にできなくなってしまうです。
またしばらく投稿できないと思います。

FILE 8 コナンの期待（前書き）

言っておきますが・・・
哀ちゃんはでてきません。

FILE 8 コナンの期待

- 光彦の家 -

歩美・光彦・元太の3人は光彦の部屋で明日の計画について話し合っていた。

「じゃあ、明日灰原さんを元気付けるために具体的に何をするかを決めていきます。ここからは提案者の歩美ちゃん、進めてください。」

光彦はそう言うとその後の進行を歩美に譲った。

「えーっと、哀ちゃんを元気づけるためにやりたいことがあったら言ってね。私は、何か哀ちゃんが元気になれるようなことを言おうと思ってるの。『元気出して!』って感じでね。でも、そのまま言うのも・・・って思ってた。」

歩美は哀にそのまま言うのではなく、間接的に伝えようと思ってるようだ。

すると元太が・・・

「俺もいいこと考えたぞ。」

元太はこの続きを言おうとしたが、光彦がそれをさえぎるように言った。

「元太君、君はもしかして『お菓子を持ってきてみんなで食べよう』みたいな事を言おうとしたんじゃないですか?」

「そうだけ。お菓子はみんなで食べればおいしいし、それに楽しいだろ? だったら灰原だって・・・。」

「確かにみんなで食べればおいしいですけど、それって元太君が食べたいだけなんじゃ……。」

そんな時……

「あゝっ!!」

元太のお菓子発言で歩美は何か閃ひらめいたようだ。

「何なんです？歩美ちゃん。」「何なんだ？歩美。」と驚いた2人に歩美は説明する。

「あのね私、今の元太君が『お菓子持つてこよう』っていうのでいい事考えたんだ。私と元太君のアイデアをあわせるの。お菓子で私の言ってたメッセージをお菓子で表現するっていうのはどう？」

「いいんじゃないのか？」

「いいですねえ、歩美ちゃん。元太君もたまにはいいこと言いますね。」

「たまには……って光彦そんなことねーだろ？」

元太は光彦の言ったことに反論したが、2人とも歩美の“お菓子メッセージ”案には賛成のようだ。

このあとも3人は明日、具体的に何をするかを話し合った。

約1時間後・・・

「これくらいでいいんじゃない？」

という歩美の声で話し合いは終わった。

「じゃあ、ちよつと待っててください。」

と言って光彦は下へ降りてある物を取りに行った。

数分後・・・

光彦はお菓子とジュースとコップをお盆にのせて持って戻ってきた。

「明日のことも決まりましたし、お菓子でも食べましょう。ジュースもありますよ、元太君。」

そのあと3人はお菓子を食べ、ジュースを飲みながら明日のこととは関係のないおしゃべりをして楽しみ、5時頃歩美と元太は光彦の家を出た。

そのころコナンは漢字の宿題をやっていた。数十分前までは暗号を考えていたのだが、いいアイデアが浮かばなかったので“息抜き”としてやっているのだ。でもこの漢字の宿題、コナンにとっては一苦勞なのである。というのは、コナンは外見だと“小学一年生”だが、本当は“高校二年生”だからだ。もちろん、歩美たちより多くの難しい漢字を知っている。それを漢字の宿題で『習った漢字で文を作る』というのにうまく使ってしまふことがある。二、三年程度のものなら“ちよつと知っている”で済ますことができるが、難

しすぎるとそうもいかない。だから大変なのである。

そして他のことも考えていた。
博士に電話をいつかけるかだ。

コナンとしては哀がない時（地下室にいる・・・など）にかけた
いのである。

その方が哀に知られないで済むからだ。

このことに対してコナンは、あることを期待していた。

FILE 8 コナンの期待（後書き）

まず・・・、前に小説を投稿したのは6月5日。

そうです、1ヶ月がたってしまいました。

これには理由があるんです・・・

6月14日～21にまでの6日間は高校の定期テストだったんです。テスト1週間前から試験勉強を始めるため、小説を全くこのテスト期間中に書くことができなかったんです。

前作を書いていた頃にも一度テストにぶつかっていましたが、

あのときはまだちょこちょこ書いていたんで1ヶ月もたつことはありませんでした。

でも今回は2年の最初でテストも難しいだろうということで、書けなかったんです。

そしてテストが終わって「さあ、書こう」と思ったんですが、

2週間も書いていなかったせいか、セリフとかが浮かんでこなくて

・・・

浮かぶのに1週間くらいかかりました。

本当はこのFILE、まだもうちょつと書くつもりだったんですが、まだ書ききれなくて、ちょっと中途半端かとは思いましたが、きりのよさそうなところでFILE 8は終わりとさせていただきます。

FILE 9 暗号のタネは休む？

そのころ・・・阿笠邸では・・・

「博士、早いけどお風呂入ってくるわね。」

と言った哀はお風呂の方へと体を向けた。

それと同時に博士はあるモノの方へと向かった。

とここで哀は思い出したかのように言った。

「あ、そうそう博士、明日の昼から工藤君たちと公園に遊びに行くから。」

「あ・・・ああ。楽しんでくるんじゃぞ。」

この「楽しんでくるんじゃぞ」は100%本心ではない。

もちろん、本当に哀に「楽しんできてほしい」と思っているが、

（まあ小学生でない哀が公園を楽しむというのには多少無理があるかもしれない。）

行動を起こしかけた時に哀の声をかけられ、早く行動を起こしたいという気持ちから、

「早くお風呂へ行つてほしい」という気持ちも含まれている。

哀の姿が見えなくなると、博士はコナンに電話をかけた。

R R R R R・・・

宿題をしていたコナンの携帯電話が鳴った。

博士からの電話だということを確認すると、電話に出た。

「博士、待ってたぜ。」

そう、コナンが期待していたのはこのことだったのだ。

「ワシがかけてくること知ったのか？」

博士は驚いたようだ。

「いや知っていたんじゃないかって予想していたんだ。灰原のことでか
けてきたんだろ？」

「ああ、そうじゃ。今朝、哀君が元気なくつてのお・・・。ワシが
話しかけるまで何もしゃべらなかつたんじゃない・・・。元からよくし
やべるわけじゃなかつたが、今朝は特に・・・。あまり詮索するの
もよくないと思って理由はきかなかつたんじゃない。でも帰ってきてか
らはそうでもなかつたから、少し安心したんじゃないがな。さっきもお
風呂に入ってくると言って今風呂に入つとる。それで今かけてるん
じゃ。もう大丈夫だと思っくんじゃがな。」

とこの話が終わつたと思つたコナンは“例の話”を切り出した。

「灰原のことはたぶん大丈夫だろうから・・・。それより博士、ち
よつと頼みてーことがあるんだ。って言つてもオレも頼まれたんだ、
アイツらに。“博士に頼むこと”をな。」

「歩美君たちに頼まれたのか？ああ、いいが。で、ワシは何をやれ
ばいいんじゃない？ひよつとして哀君に関係があるのかのお？」

博士はなんとく、哀に関係があると思つたようだ。

「そうだぜ。明日の昼から『灰原を元気づける会』を博士の家でや
るから、博士には会場提供をしてほしいんだ。」

「ああ、別に構わないがお・・・。ちよつと待ってくれ新一。哀
君は新一たちと公園に行くと言つとつたんだが・・・。」

博士は哀を元気づける会をするということを忘れていたのだろうか？それともわかつてはいたが、“そこ”まではわからなかったのだろうか？

「博士、そういうのを知らされてやるのと、知らされないでやるのとではどっちが喜びが大きいと思う？」

「そりゃ知らされなかった方がいいに……ああそうか、哀君には『公園で遊ぶ』ということにしたんじゃない。じゃあ新一たちが迎えに来るということにして始めるんじゃない。」

博士は後者の方であったようだ。

「だろ？でもそっちにオレらが行くんじゃなく、灰原の方から出向いてもらうのさ、“オレン家（とこ）に集合”ってことにしてな。準備もしねーといけねーから。オレは灰原が来る前に出る。」

「でも新一、哀君がそっちに行つて新一たちがいなくなったら困るんじゃないのか？それにどうやってこっちに来させるんじゃない？」

博士が疑問を持つのも当然である。

「それはオレがアイツらに頼まれたもう一つの仕事だ。暗号を作るんだよ。ゴールを博士の家にしてな。あとたぶん博士が聞くだろうから先に言うけど、その紙を渡すのは蘭に頼むつもりさ。灰原が暗号を解いている間に準備するんだ。オレらがそっちに行く時間はまだ決まってるから。そうだ、博士灰原が出発したらオレの携帯に電話してくれねーか？灰原がオレン家（とこ）に着いた頃を見計らってそっちに行くからよ。」

博士はまた疑問を一つもったようだ。

「別に構わないが……哀君が来る頃を見計らって……っていうのはどういふことなんじゃ？哀君が来る前に出るっていったんじゃない

なかったのか？」

「ああ、悪い悪い。まだアイツらには言っ
てねーんだけど、灰原がそっちを出る前にどこかに集合しようと思っ
てな。それで博士からの電話のあとしばらくしてからそっちに行こうと思っ
て。鉢合わせしちゃマズイだろ？灰原がどこ通って来るかわかんねーからな。」

「そうじゃな鉢合わせしちゃマズイのお。わかった、哀君がこつちを出たら電話したらいいんじゃない。もういいかのお？哀君ももうすぐあがってきそうじゃし……。」

と博士は電話を切ろうとしたのだが……

「ちょっと待ってくれ博士、最後に一つだけ……。」

「ん？なんじゃ新ー。」

コナンはまだ博士に言いたいことがあったようだ。

「テーブルの辺り片付けといてくれよ。それまで片付けてたらこつちの準備が出来ねーから。」

「わかった……片付けておくよ。じゃあ切るぞ。」

“わかった”ということは現在散らかっているのだろう……

博士との電話を終えたコナンは再び漢字の宿題を始めた。

今やっているのは“休”。これで文を作らなければならない。

コナンが考えた文は……

「きょうはねつが出たので学校を休みました。」

『休』という字を書いたとき……

「ああっ、これだっ！」

どうやらコナンは暗号のタネを閃いたようだ。

「これは辞書で探さねーといけねーな。蘭にアレを頼むついでに借りるか……。」

数時間後・・・

毛利探偵事務所

「ごちそうさま。」

みんなが食べた食器をコナンが運び、蘭が洗う。小五郎はというとまだビールを飲んでいる。

蘭は食器を洗い終わると宿題があるのか自分の部屋へ入っていった。コナンも“コンコン”とドアをノックし、「蘭姉ちゃん、入るよ。」と言って蘭の部屋へ入った。

「何？コナン君。」

「漢字の宿題で習った漢字で文を作らないといけないんだけど、いい言葉が思い浮かばなくて。だから辞書貸してほしいんだけど・・・。」

「いいわよ、じゃあ電子辞書貸してあげるわ。国語辞典もあるし、漢字辞典も入ってるから。」

漢字辞典の使い方がわからなかったら聞いて。そんなに難しくはないんだけど・・・。ああそうだ、ちょっと待って。」
と言って蘭は電子辞書を操作した。

「はい、これでコナン君でも使えるわ。私はいつもローマ字入力で使ってるけど、コナン君はまだローマ字知らないでしょ？だからかなめくり入力にしておいたわ。例えば、『う』って打ちたかったら、『あ』のところを3回押したらいいから。じゃあ宿題頑張ってねコナン君。」

そしてコナンはこの事よりもっと重要なあの事を切り出した。

「ねえ蘭姉ちゃん、明日の昼からは家にいるんだよね？」

「ええ、そうよ。どうかしたの？」

「ちよつと頼みたいことがあるんだ。実は今日灰原がとても元気なかつたんだ……。それでいつもの仲間^{メンバー}で灰原を元気づける会を明日の昼から博士の家でやることになったんだ。でも準備もしないといけないから、灰原には一度博士の家を出てもらわないといけないんだ。だから灰原には公園に遊びに行くから一端ここに集合っていつてあるんだ。」

それで灰原が来たら、渡してほしいものがあるんだ。まだ出来ないから明日渡すんだけど。あと元気づける会をするってことは灰原には言わないでおいてね。」

「わかつたわ。哀ちゃんが来たらコナン君からもらった物を渡せばいいのね。」

元気づける会の事は上手くごまかすから。」

「ありがとう、蘭姉ちゃん。」

そう言うとコナンは蘭の部屋から出て暗号の製作にかかった。

FILE 9 暗号のタネは休む？（後書き）

前の投稿から1ヶ月たってしまいすみませんでした。夏休みに入って執筆もスピードアップするはずが・・・宿題もやらないといけませんし・・・結構たくさん出ていてそっちの方を頑張っていて・・・。蘭が使っている電子辞書は私の使っているものがモデルです。

FILE 10 「寝る」の真の意味（前書き）

哀ちゃんはラストの所にちよつとだけ出てきます。（すみませんね・
・哀ちゃん主役なのに出演が少ないですね・・・）

ビールの追加を頼む小五郎に悲劇！？が

FILE 10 「寝る」の真の意味

暗号の下書きが出来上がったコナンは電子辞書を蘭に返すため、蘭の部屋に入った。

「蘭姉ちゃん、宿題終わったから返すね、ありがとう。」

「宿題出来てよかったわね。またいるんだったら言つてね。あ、そうそうコナン君・・・。」

と蘭はコナンに何か頼もうとしたが、小五郎の声によって遮さへられた。

「蘭ちゅわあくん、ビールくれえ〜ビールう〜。」

「もうお父さんったら。コナン君、お父さんに言ってくれる?『ビールはもう終わり』って。」

そう、さっき蘭が言いたかったのはこのことだったのだ。するとコナンが何か閃ひらめいたような顔で言った。

「蘭姉ちゃん、昨日買ってきた。。。。。。。（実際は言ってますが、皆さんにこれが何なのか考えていただきたくこのような形にしました。）確かまだ余ってたよね?」

「ええ、まだあるはずよ。でも・・・えっ・・・まさかコナン君!？」

蘭はコナンのしたいことを理解したようだ。

「そう、そのまさかだよ。たまにはこういうのもいいんじゃない？」
「そうねえ、たまにはいいかもね。あ……でもアレを使うのはいいけど、それじゃあお父さんさんが飲む前に気づいちゃうんじゃない？色は似てるけどアレがないでしょ？」

「だからボクがやるんだよ。ボクならなんとかごまかせるでしょ？」
「そうね、コナン君ならなんとかごまかせるかもしれないわ。」

どうやらこの作戦はコナンがやる方がいいらしい。

コナンはそれを実行するために蘭の部屋を出て小五郎に言った。

「おじさん、瓶はもうダメだけど缶なら1本だけいいってさ。ボクが入れてきてあげるからコップ貸して。」

「おお、入れてきてくれるのかあ、頼んだぞお、コナン。」

小五郎は何も知らずにコナンにコップを渡してそう言った。

コナンは台所で小五郎から手渡されたコップに“ビール”を注ぎ、小五郎に“ビール”の入ったコップを渡した。

「はいおじさん、ビール。」

「おお、入れてきてくれたんだなあ。ん？泡がねーじゃねーか。」

「ごめんなさあ、い、おじさん。一気に入れると泡でコップから溢れ出しそうで怖かったらゆっくり入れたらこうなっちゃった。」

「まあしゃあねーなあ。ありがとよお、コナン。」

小五郎は何も知らずにコナンから手渡された“ビール”を口にした。

ゴクッゴクッ・・・

次の瞬間、小五郎は酔いが宇宙の果てまで飛んでしまったような声で言った。

「何だあこの“ビール”は。いや、これは“ビール”じゃねえ。これは“リンゴジュース”だ！だから向こうで入れてたんだな？こっちで入れるとビールじゃねえことがバレちまうから。まったくどっちだ？こんなこと考えたのは。コナン、まさか蘭に餌でつられてこんなことしたんじゃないだろうな？」

とここでさっきの小五郎の“酔いが宇宙の果てまで飛んでしまった”大声を聞いた蘭が、“そろそろ”といった感じで部屋から出てきた。

「これはコナン君のアイデアよ。ねえコナン君。」

「うん。」

「ってオマエらなあ・・・」

「おじさん、飲みすぎはダメだよ。」

「・・・・・・」

コナンの言っていることが正しいため、さすがの小五郎も言い返すことが出来なかった。そしてこの“偽ビール騒動”から話題をそらした。

「宿題は終わったのか？コナン。さっきやってただろ？」

「うん、“終わった”よ。」

さっき確かにコナンは何かをやっていた。しかし宿題をやっていたのではない。小五郎が勘違いしたのは2つの理由がある。1つは酔っ払っていたから・・・もう1つはコナンが小五郎から少し離れた所に小さなテーブルを出してやっていたからだ。

「蘭、ビール・・・やっぱダメか？」

小五郎は、『偽ビール事件のおわびでビールをもらえるかも』というかな期待を寄せてそう言った。

「ダメよ、何のためにやったと思ってるの？お父さん。」

小五郎の期待はいとも簡単に崩れ落ちてしまった。

午後9時・・・阿笠邸

「博士もう“寝る”わね、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ・・・。」

そう言った哀は地下へと下りていった。

だが、今すぐ寝るわけではない。では、なぜ哀は博士にそんなことを言ったのか。それは、“1人でいたかったから”だ。「地下室へ行く」と言えば、邪魔しないように下りてくることはないかもしれないが、100%そうとは言えない。哀は確実な方を選んだのだ。

「1人でいたいんじゃない・・・哀君。」

博士は哀の「もう寝るわね」と真の意味をちゃんと理解したようだ。

この夜、哀は夢を“見なかった”。いや、正確に言うと“覚えていない”だけなのだが・・・

FILE 10 「寝る」の真の意味（後書き）

夢は毎日見ているのですが、覚えていない・・・そういうときはノンレム睡眠に陥ってから目覚めるためです。夢は基本的にレム睡眠の時に見ます。（最近はずレム睡眠の時に夢を見ることが確認されているようです）人の睡眠はレム睡眠とノンレム睡眠が繰り返されます。

明日からテスト1週間前でPCが基本的に使えません。私はノートに書いてからPCに打ち込むので、ノートに書けなければ、もちろんここに打ち込めません。なので次話投稿はまたまた先になります。出来るだけ頑張りますので、よろしく願います。

FILE 11 暗号の手紙

朝8時 阿笠邸

哀は目覚めた。横のベッドを見ると博士はいなかった。

「博士もう起きてるみたいね……。それにしてもはやけに静かね。音が全くしてないんだけど」

静かで音がしないのも当然、だって博士は……

哀はパジャマから服に着替えて1階にあがった。

「博士、おはよう。今日は早いね」

とまだ眠たそうな声で言った哀は目を睜^{みは}った。

なんと“白い空間”の中にあるソファで博士が寝ていたのだ。今の哀の聲が目覚ましになったのか、博士が目覚めた。

「ああ、哀君おはよう」

「博士なんでこんな所で寝てたの？ それにどうしたの？ この部屋」

昨日まで散らかっていたこの部屋が綺麗に片付いていたのだ。哀に言われて片付けることはよくあるが、自分から進んでしかこんなに綺麗に片付いていたので哀は驚いたのだ。

「ちょっと探し物をしててのお。見つかるには見つかったんじゃが、探す前より散らかってしまっただけ片付けたんじゃ。終わってちょっとソファで休もうと思ったたら寝てしまったみたいじゃのお。でもワシもやる時はやるだろ？ 隅の方はまだ少し散らかっておるが……」

もちろんこれはウソである。

「せっかく自分から片付けたんだから、このまま維持してよね」
「ああ、頑張るよ。」

博士はそう言ったものの内心では「たぶん無理じゃろうな……仕方なくしたんじゃないか」と思っていた。

「ちょうどその頃の毛利探偵事務所」

「今日は全国的に晴れで過ごしやすい1日となるでしょう……」
TVの天気予報が流れている。

コナンと小五郎は朝ごはんを食べている。蘭は部活のためもう学校へ行ってしまっている。

「おじさん、今日は10時くらいに友達来るから」
「ああ、昨日蘭が言ってたな。あんまり騒ぐんじゃないぞ。俺だって忙しいんだからな」

(どーせヒマなくせに・・・)
小五郎に怒られるから口には出さないが、コナンはこう思っていた。

10時前に歩美、光彦、元太の3人がそろってやって来た。3人とも色々持ってきているようだ。

「それでいい案は出たのか？」
アイデア

昨日3人で相談して決めたことを歩美が代表してコナンに話した。

「それはいいじゃねーか。で、使う物を持って来たのか？」

「私はキャラメルを持って来たわ。後は折り紙、はさみ、のりも」
「僕はクッキーを持ってきました。味が2種類あるんです。後ペンとはさみとのりも持ってきました」

「俺は飴を持って来たぜ。家に折り紙がなくてよ、だからはさみとのりしか持ってきてねーけどな」

はさみなどを持って来たということは、何かを作るつもりでいるのだろう。コナンもそう思い……

「何を作るんだ？」

「輪飾りを作るの」
と歩美が答えた。

そしてコナンたちは折り紙で輪飾りを作った。最終の打ち合わせもした。

「博士には今回の事言っておいたからな。灰原が出たら博士に電話してもらうことにした。灰原が出る前にどこかに集まるうと思って鉢合わせしないように。どこにする？」

相談の結果、小学校の校門前に1時半になった。

そろそろ帰ろうかという時、光彦が言った。

「集合は学校でいいですけど、灰原さんがいつ来るかわからないですよね。どうにかありませんか？」

その疑問にコナンが答えた。

「じゃあ、蘭姉ちゃんに灰原がここに着いた時と、出たときに連絡してもらうように頼むよ」

そして解散した。

しばらくして、蘭が帰ってきた。お昼を作り出した蘭に、コナンはさっきのことを頼んだ。

「わかったわ」

蘭は快諾してくれた。

1時過ぎ、コナンは「蘭姉ちゃん、頼んだよ」と言っ、あの暗号の紙を渡し、必要な物を持って家を出た。その時に蘭が「これ、今クラスで流行^{はや}ってるジュースなの」と言っ、ジュースを持たせてくれた。

コナンが校門前に行くと、珍しくもうみんながそろっていた。みんな必要なものを忘れずに持っている。

15分ほどして、コナンの携帯に博士から電話があった。

一方哀は……事務所へ向かっていた。そして……

「ピンポン」

と事務所のインターホンを鳴らした。するとすぐに蘭が出て来た。

「哀ちゃん、いらっしやい。コナン君から聞いてるわよ」
と言われ部屋にあがったのだが……

「あの、江戸川君は？」
と哀は疑問を口にした。

「そうなのよ……哀ちゃんが来るって言ってたのに30分くらい前に出て行っちゃったの。でもその時に哀ちゃんに渡して欲しいものがあるって預かってる物があるの。ちょっと待っててね」

と言って、蘭は自分の部屋に行き、あの手紙を持って来た。その時にあらかじめ打っておいたメールをコナンに送った。哀がいるからその方がいいと思ったのだろう。

「おっ、来た来た……」
コナンはメールを見た。

「哀ちゃんが来たよ。今からあの手紙、渡すからね。じゃあ、頑張っ
てね」

「じゃあ、オレらも行くとするか」

コナンたちは博士の家へと向かった。

「はい、これがコナン君に頼まれていたものよ。あつ、そうだと
言って蘭は台所へ行き、ジュースを持って来た。

「のど渴いたでしょ？ これ飲んで。それにしても何だろうね、そ
の手紙。じゃあ私は部屋にいるから、帰る時は言っ
てね」と言い、蘭は自分の部屋へ入っていった。

「何かしら……この手紙」

哀は手紙を開けた。そこには……

おねさかH の 休空（↑↓）

ここで待ってる

と書いてあった。

「何よ、これ……」

FILE 11 暗号の手紙（後書き）

皆様、こんばんは。1週間ほど前に新作の「ありがとうと言える日」を始めました。この「元氣のない哀へ・・・」はめっちゃくちやくしぶりの更新となりました。昨年の9月以来、更新してませんでしたね。あの後、続きがなかなか浮かんでこなくて、またテスト前になつてしまい……。そうしたら余計に続きが浮かばなくて……。やっと完成しました。実は、この暗号の原型は1年以上前に椅子の落書きを見て思いついたものです。でもあれから1年以上、いざ小説にするにあたつてかなり手を加えて今の形になりました。暗号、わかるでしょうか？「おねさかH」と「休空（↑↓）」は同じ考え方ではありませんよ。では、暗号、考えてみてくださいくださいね。まあ答え自体は小説を読んでくださってれば、わかりますが……。なぜあの答えになるのかっていうのを……。

12話、まだ全然書いてませんが、できるだけ早く書きますのでこれからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6791b/>

元気のない哀へ・・・

2010年10月9日01時26分発行